

隨泉寺寺報

平成18年(2006年) 1月号 第425号

TEL 082-892-0217 <http://www.ttec.co.jp/~zuisenji/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

御正忌報恩講法座

講師 住職自修

講題 「御伝抄のころ」



☆年頭のあいさつ

老院(前住職) 鎌田 不動

あけまして おめでとうございます。

一年の計は元旦にありと申します。〃今年遠慶宿縁〃を肝に銘じて〃我行精進〃を一年の目標と致します。親鸞聖人は、ご本典「教行信証」の総序のご文に『阿弥陀如来のご本願をお聞かせにあずかり、真実の信心を得ることは億劫(ながい時間)にも獲ることは難しい、それなのにたまたま行信を獲たならば遠く宿縁を慶べ』と、御示し頂きました。

愚僧が隨泉寺に住持し、門信徒の皆様よりお育てを頂き、今日まで五十年の間歩ませて頂いたことを回顧して、まさに『遠く宿縁を慶ぶべし』のお言葉をかみしめ、内なる意に合掌して称名念仏、報恩感謝の他はございません。元氣とは言えども、老少不定、有為転変の世界、「我が行いを精進して」いのち尽きるまで一日々々を精一杯歩みを進めたいものと念じて止みません。有縁の方々に越しかたを振り返り御礼を申し上げますと共に、今からが正念場、今から先の私の生きざまをお見守り頂きますよう御願い申し上げます。年頭のあいさつと致します。 合掌

1月の法座予定

- 1月 8日.....掃除 桑原・瀬野川団地
- 1月 14日 昼席午後1時より.....御正忌報恩講法座
- 1月 14日 夜席午後7時半より.....御伝抄拝読上巻
- 1月 15日 朝席午前10時より.....御正忌報恩講法座 御伝抄拝読 おとき
- 1月 15日 昼席午後1時より.....御正忌報恩講法座 御俗抄拝読
- 1月 15日 午後2時より.....新年互礼会
- 2月 2日 午後6時より.....門信徒会本部役員会

☆年頭のあいさつ

隨泉寺門信徒会会長 平岡周三

新年あけましておめでとうございます。

皆さまには、お健やかに新年をお迎えのことと、心からお喜び申し上げます。昨年中は門信徒会の運営に対しまして、何かとご指導やお力添えを賜り、おかげをもちまして、つつがなく年越しすることが出来ました。これもひとえに皆様のおかげと厚くお礼を申し上げます。

昨年は、隨泉寺開基400年記念法要を無事終えることが出来ましたが、記念講演の講師チベット女性のバイマーヤンジンさんのお話の中で、日本は天国です。なに不自由することなく、幸せそうに暮らしていますが、感謝の気持ちがなく、家族の団欒がなくばらばらである「幸せとは 何でしょうか」と話されたことが、印象深く心に残りました。

また、国内では凶悪犯罪が次々と起き、悲しいことが多すぎました。今年平和で、一人でも多くの人々が、如来様のおよび声に答えて、人生が深い安らぎと喜びに味わい、お念仏を慶び聞法の友の輪が広がりますよう念じます。

皆様の今年一年のご健勝を念じあげますとともに、本年もよろしくご指導、ご協力を賜りますよう、心からお願い申し上げます。 合掌

平成18年正月

婦人部部長 太尾田 道子



迎春

新年のおよろこび申し上げます。慈光照護のもと、お念仏御相続の事とおよろこび申し上げます。隨泉寺修徳仏教婦人会の活動には御協力、御尽力まことにありがとうございます。2005年世の中には、さまざま出来事がありました。安芸北組スローガンに『御同朋の社会をめざして』【仏教婦人としての自覚をあらたにし活動ある聞法者になろう】とあります。皆々様方の思いにいろいろとおありの事と存じます。仏法に遇い私どもを導いてくださる如来さまのお恵みの中に生かされてお念仏申させていただくよろこび、人間に生まれ、いのちの尊さ手を合わせお念仏申す嬉しさ、ありがたさ、皆様方とお会いし、ご縁をいただき、共に聴聞させていただける事、とても嬉しく思っています。どうぞ昨年同様本年もよろしく、お願い申し上げます。 合掌

平成十八年 正月

☆御正忌報恩講

親鸞聖人の33回忌の時、第三代覚如上人はそのご遺徳を鑽仰するために『報恩講式』をつくられ、報恩講がいとなまれました。以来、聖人のご命日の法要は報恩講として大切にお勤まりになっています。正しくお念仏のいわれを聞かせていただき、身にいただいて、真実信心の行者になることが聖人のご恩に報いる道です。

親鸞聖人のご命日は旧暦11月28日です。これを太陽暦にあらためると1月16日ですが、隨泉寺では、1月14日と15日に御正忌報恩講をお勤めいたします。

年頭のご挨拶

随泉寺門信徒会副会長 松井 邦雄

門信徒会々員の皆様、明けましておめでとう御座います。

毎月2日に開催されます本部役員会にて、鎌田哲成住職様とご一緒に「浄土真宗の生活信条」を唱和いたします。ご案内のようにこの生活信条は四ヶ条からなり、第23代の勝如上人が昭和33年にご制定されたものであります。生活信条の第2条に「み仏の光をあおぎ 常にわが身をかえりみて感謝のうちに励みます」とあります。私は、これを唱えるとき「四季の歌」(作詞・作曲 荒木とよひさ氏)の春の部分の思い出します。「春を愛する人は、心清き人 すみれの花のような僕の友達」春を愛する人はどうして「清き心」を具えているのでしょうか。私達はいつも煩惱の日暮しを送っています。しかし阿弥陀如来の「清浄光」はそのはたらきによって私達を「浄土に生まれさせるよう浄化」して下さいます。

「み仏の光り」に照らされるものは、みんな私の友であり「わが身をかえりみて感謝のうちに励みます」という態度になります。

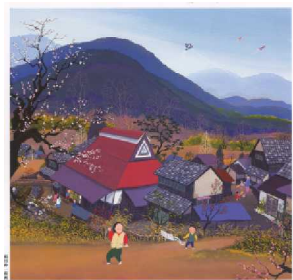
皆さん「生活信条」のもと本年もがんばりましょう。 合掌

平成18年正月

1月 カレンダー

仏さまに願われ 生かされている私 東井 義雄

私は、明治の最後の年の四月、兵庫県の日海側の山の中の、貧しい、小さな寺(東光寺)の長男として、この世に出していただきました。



仏さまに願われ
生かされている私

当時、父は、京都の大谷本廟に勤めておりましたので、実際は、京都で生まれたのでした。私の「義雄」という名前も、ご本山のご真影さま(親鸞聖人)とご相談して決めた名前だと、私は、父から度々聞かされて育ちました。私が三歳になったとき、妹が生まれたのを機に、東光寺に帰ったようです。ですから、母に手を引かれて、大谷本廟に父の弁当を持っていったこと、鳩が待っていてくれたこと、京阪電車の警笛の

音、どこか高い所から眺めた長い貨物列車の記憶が、今もかすかに残っています。「あれは、おばあちゃんが送ってくださるエエモン(よいもの)が乗ってくる汽車だ」と、母が、母の背中の人に話してくれたためでしょうか。

その母も、私が小学一年生になったばかりの五月、脳膜炎で亡くなってしまいました。五月十五日の朝、容態が悪くなり、家族みんなが集まっているとき、大きな息を吐いたのが、最後の呼吸のように思われました。みんな泣きました。私より二つ歳下の妹まで、声をあげて泣きました。泣かなかったのは私だけでした。親が死ぬということが、子どもにとって、どんなにたいへんなことであるか、わからないくらい、私は、ぼんやり者であったようです。ところが、それからずいぶん時がたったように思うのですが、急に、母が、びっくりするような音をたてて、大きく息を吸い込みました。そして、いくら待っても、その息を吐く音を聞くことはできませんでした。意識のなくなっている母ではありましたが、母には、ぼんやり者の私のことが、無意識の意識の中で、心配でたまらず、死ぬに死ねなかったのではないかと思います。「人生は、きびしいのだよ。人間には、必ずこの日が来るんだよ。どうか、一日も早く、目覚めてくれよ」と、母は、あのびっくりするような吸気音を、ぼんやり者の私の胸に、刻み込んで死んでいったのだと思います。

私は、ぼんやり者のくせに、強情で、欲張りで、素直さのない子どもであったようです。妹のおやつをとりあげたというようなことであった気がするのですが、母が、ほんとうに悲しそうな顔をしていましたが、やがて、キッと、何か決心したような厳しい顔になった

かと思うと、私の襟首をつかんで、ぶらさげ、土蔵の前まで急ぎました。いきなり、土蔵に放り込まれるのかと覚悟していましたが、土蔵の前で立ちどまり、激しく私をゆさぶりました。私が「ごめんなさい」と詫言たら赦す気だったのかもしれませんが、でも、私は、ゆさぶられながら考えました。「いま、大暴れに暴れてやったら、お母ちゃんの手ぐらい、振り切って、逃げ出すことができるんだがな」ということでした。その勝算が、私にはありませんでした。でも、私には、その考えを実行することができませんでした。それは、あのはじめの、如何にも悲しそうな母の顔のせいでした。「せっかく、お母ちゃんが、土蔵に入れようとしているのに、逃げたりなんかしたら、どんなに悲しむだろう。これ以上悲しませては、すまん」という思いが、私に、逃げ出すことをさせなかったのです。

強情で、素直さのない私に、母は「すまん…」という心の芽を遺して、死んでいったのでした。三十歳でした。

★法座出席カード

去年から始めた法座出席カード賛否色々ありますが、少しでもおまいりに励みになればと思っははじめました。去年の新年互礼会での皆さんの意見によるものです。1年経ってよいよよ結果を発表致します。受付の出席表に漏れている方もありますので、持参してください。落ちていたら判を押します。

